九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

萬葉集に於ける雑歌の表現

瀬古，確

https://doi.org/10.15017/12316

出版情報：語文研究. 12, pp.1-12, 1961-04-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

万葉集に於ける雑歌の表現

瀬古確

一

万葉集の雑歌に相聞・挽歌・譬喩歌等の部に属しない行幸・従駕・遊宴・応詔・遊猟・帝都・問答・伝説などの種々な歌を包含してゐる事は既に真淵の考以来諸家によって指摘られてゐる所であるが、今巻一の雑歌について之を見るに、行幸従駕の作が最も多く、つづいて帝都に関するもの羇旅の歌の順位となってゐる。雑歌が挽歌と共に公的な作品を集めたものとして、彼の私的な歌を主とした相聞の部類と対蹠的である事を示してゐる。

しかし行幸従駕の作にしても、或いは羇旅の歌にしても、自ら家郷の空を懐しむのは人情の自然であり、そこに相聞的な匂ひの漂ってゐるのに不思議はないのである。ただ雑歌に収められたものは、どこまでもその発想の場が従駕とか応詔・饗宴・羇旅と言ったものに求められてゐるのである。

例へば巻一に幸讃岐国安益郡之時軍王見山作歌（巻一・五―六）を見ても、行幸に供奉したものの思は旅先の風物に託して「家なる妹」に馳せずにはをられないのであり、海処女の焼く塩からも直ちに己が下情の焼くる思ひを歌ひ上げずにはをられないのである。

或いは太上天皇幸于難波宮時歌（巻一・六六―六八）などの作にしても、何れも相聞的な匂ひが濃厚であって「家」とか「妹」とかを中心として詠じてをり、中には「恋ひて死なまし」とまで極言してゐるのである。

更に大行天皇幸于難波宮時歌

大和恋ひ寐の寝らえぬに情なくこの渚埼廻に鶴鳴くべしや

（巻一・七一　忍坂部乙麿）

にしても旅先にあって大和を懐しんだものであり、供奉の際の私情を述べたものが多いのである。

しかし中には幸于吉野宮之時柿本朝臣人麿作歌（巻一・三六―三七）の如く長反歌共に吉野の宮地を讃美する事に終始したものもあ

るにはあるが、多くは大和を恋ひ家を思ひ妹を懐しむ作品が見受けられるのである。

直接行幸の地の風物を敍する場合はもとより、その地の風物にたぐへて自らの私情を述べる時に於いてさへ、自然への心の動きを見逃す事は出来ないであらう。ここに行幸従駕の作に自然観照の作の現れる芽生を見るのである。

彼の軽皇子宿二于安騎野一時柿本朝臣人麿作歌の反歌の一首に

東の野に炎の立つ見えてかへりみすれば月西渡きぬ

（巻一・四八）

の如く夜明け方の広大な自然を詠じたものの現れてゐる事は――たとへそれは純然たる自然詠ではなくして、亡き日並皇子に対する追慕の影が長く尾を曳いてゐるものではあったにもせよ（註一）――注意せらるべき事実である。

行幸従駕の作にその地の景観を詠じ風物に託した想情の盛られるのは当然の事で、自然観照の芽生は後に述べる羇旅の場合と共に自らそこに萌したものと思はれるのである。

かくて二年壬寅太上天皇幸二于参河国一時歌に見える高市連黒人の歌

何所にか船泊すらむ安礼の崎榜ぎ廻み行きし棚無小舟

（巻一・五八）

の如く深々と旅愁を湛へた作品とか、或いは太上天皇幸二于吉野宮一時高市連黒人作歌

倭には鳴きてか来らむ呼子鳥象の中山呼びぞ越ゆなる

（巻一・七〇）

の如く旅先で聞く呼子鳥を懐しい倭との関聯に於いて歌った佳作を生むに到るのである。

或いは舍人娘子従駕作歌

大夫の得物矢手挿み立ち向ひ射る的形は見るに清けし

（巻一・六一）

の如く清けき的形の地を讃美したものもあれば更に慶雲三年丙午幸二于難波宮一時志貴皇子御作歌

葦辺行く鴨の羽交に霜零りて寒き夕は大和し思ほゆ

（巻一・六四）

の如く、寒い旅先の風光を印象的に描いては家郷を偲んだ作も現れてゐるのである。即ち行幸従駕の作には公的に大王の帝徳を讃仰したり、宮地を讃美したりするもののあるのはもとより、佳景に接しては自らその地とかその風物に心を動かさずにはをられないのであり、たとへ風物に触発せられてその思を表現したものが多いにもせよ、何れも自然観照の眼を高めるのに役立った事は確かである。

二

巻一の雑歌にあって行幸従駕の作につゞいて多いのは帝都に関するものである。遷都の度ゝ行はれた当時にあって新都を讃へ荒都を悲しむ歌の多くものせられるのも亦当然である。

過近江荒都時柿本朝臣人麿作歌（巻一・二九―三一）にその荒廃の様を歌はれたのをはじめ、高市古人感傷近江旧墟作歌（一・三二―三三）の如く「荒たれる」事が歎かれてゐる。

中でも明日香宮より藤原宮に遷都の後志貴皇子によって詠ぜられた

采女の袖吹きかへす明日香風京を遠みいたづらに吹く
（巻一・五一）

の如きは、も早や都ではなくなって了った故都明日香の地の淋しさを美しい采女の袖をひるがへす姿の見られない事によって巧みに之を現してゐる。「明日香風」と言ひ「京を遠み」と受け、更に「いたづらに吹く」と結んでゐる所に、作者の淋しさが巧みに具象化せられてをり、佳品として誦するに足るものがある。

帝都に関する歌としては又藤原宮役民作歌（巻一・五〇）とか藤原宮御井歌（巻一・五二―五三）等があって、特に後者（五二）にあっては香具・畝火・耳無の山々によって囲まれ遠く吉野の山々を見遙かす藤原宮の四囲の景観を写してゐる。

ついで羈旅の歌は巻一雑歌の第三位を占めてゐるけれども、風物によってその思を触発せられる程度で、未だよく自然を観照しえた佳作に接しえないのである。

三

巻一にあっては未だ第三位に過ぎなかった羈旅の歌は巻三の雑歌にあっては第一位を占めるに到ってをり、帝都に関する歌饗宴の作行幸従駕の歌が之に続いてゐる。

巻三の羈旅の歌には巻一のそれとちがって自然への心の動きを力強く示したものが少くなく、相聞的な発想も猶見受けられはするものの、自然の秀麗さ清澄さに心を傾け、純然たる自然観照の作と覚しきものも少からず現れてゐるのは特に注目せらるべき事実である

即ち田口益人大夫任上野国司時至駿河浄見埼作歌
盧原の清見か埼の三保の浦の寛けき見つつもの思ひもなし
（巻三・二九六）
昼見れば飽かぬ田児の浦大王の命かしこみ夜見つるかも
（二九七）

などの如く、或いはその「寛け」さを喜び、或いは昼その佳景に接しえないのを歎いてゐる。ここにも地方に赴任する国守がよい風光に心を動かした事を示すもので、羈旅の歌にあって自然への心の動きの家郷を偲ぶ情と共に詠ぜられるのは自然の勢である。ただとかく家郷の空に引かれる力が強く自然への傾きの容易に現れなかったまでである。かくて

み吉野の高城の山に白雲は行きはばかりてたなびける見ゆ
（巻三・三五三　釈通観）

の如く山に棚引く雲に注意を払ふものもあり、

住吉の得名津に立ちて見渡せば武庫の泊ゆ出づる船人
（巻三・二八三　高市連黒人）

の如く得名津の眺望を歌ひ上げたものもある。

更に

葦辺には鶴が音鳴きて湖風寒く吹くらむ津乎の埼はも
（巻三・三五二　若湯座王）
今日もかも明日香の河の夕さらず蝦なく瀬の清けかるらむ
（巻三・三五六　上古麻呂）
或本歌発句に云ふ明日香川今もかもとな

などの如く津乎の埼とか明日香の河等を思ひやって歌ったものさへ見受けられるのであり、

吾妹子に猪名野は見せつ名次山角の松原いつか示さむ
（巻三・二七九　高市連黒人）

の如く思ふ人に次々と名所を見せようとするものもある。

かくて高市連黒人の羈旅歌に

桜田へ鶴鳴きわたる年魚市潟潮干にけらし鶴鳴きわたる
（巻三・二七一）

四極山うち越え見れば笠縫の島榜ぎかくる棚無し小船
（二七二）

磯の埼榜ぎ回み行けば近江の海八十の湊に鶴多に鳴く
（二七三）

などの如く自然を客観的に詠じた佳作の現れて来るのに何の不思議もないのである。

しかし同じ八首一聯の作中にあっても

旅にして物恋しきに山下の赤のそほ船沖に榜ぐ見ゆ
（二七〇）

吾が船は比良の湊に榜ぎ泊てむ沖へな放りさ夜ふけにけり
（二七四）

何処にか吾は宿らむ高島の勝野の原にこの日暮れなば
（二七五）

などの如く深々と旅愁を湛へた作もあり、

妹も我も一つなれかも三河なる二見の道ゆ別れかねつる
（二七六）

と言った「妹」との繋りに興味を持ったものさへあって羈旅の歌に於ける伝統的な詠風も皆無ではないけれども、一方にあっては又

疾く来ても見てましものを山城の高の槻群散りにけるかも
（二七七）

の如く多賀の秋におくれたのを歎く作もあって、旅によって自然を見る眼の開かれるのと共にそれだけ強く自然への愛惜を詠ずる事ともなり、自然観照のすぐれた作をも生むに至る事情をこの八首一聯の作が有力に物語ってゐるやうである。

山部宿禰赤人の「不尽山を望める歌」（巻三・三一七―三一八）とか無名氏の「不尽山を詠める歌」（巻三・三一九―三二一）等も現れてをり、特に赤人の反歌

田児の浦ゆうち出でて見れば直白にぞ不尽の高嶺に雪は零りける
（三一八）

の如く富士の秀麗な姿に接した旅人の驚きを巧みに詠じたものもある。

勿論赤人の作にも春日野に登ってものした長反歌（巻三・三七二―三七三）の如く自然の風物によって触発される自らの思を歌ひ上げたものもあって、そこには伝統的な詠風を見出さずにはをられないのである。かゝる発想形式は山部宿禰赤人の歌六首（巻三・三五七――三六二）にも通じて見られる所であり、中には第一首（三五七）の如く釣舟にスポットライトを当ててゐるものもあるけれども

秋風の寒き朝けを佐農の岡越ゆらむ君に衣借さましを
（三六一）

鵤鳩ゐる磯回に生ふる名乗藻の名は告らしてよ親は知るとも
（三六二）

などの如く――前者が赤人の妻の作であらうと、赤人が女の心になってものした代作であるとに拘らず、（註三）――相聞的な色彩の濃厚である事は確かであり、ここにも巻一所収の行幸従駕の作や羈旅の歌に通ずる伝統的な手法を見逃しえないのである。

猶帝都に関する歌は巻三にあっては第二位を占めてをり、中でも注意すべきは太宰少弐小野老の

あをによし寧楽の京師は咲く花の薫ふが如く今さかりなり
（巻三・三二八）

なる国都讃美の歌であって、よく殷賑を誇る帝都のさまを「咲く花」の美しさによって具象化したものである。或いは防人司佑大伴四綱の

藤浪の花は盛になりにけり平城の京を思ほすや君
（巻三・三三〇）

の如く「藤浪の花」と共に平城の京を偲ぶ作も見受けられるのである。こゝにも風物に託してその想情を述べようとする伝統的な手法を見逃しえないのである。

巻三雑歌に於ける第三位は饗宴の歌である。ここには山上憶良の宴を罷る歌

憶良らは今は罷らむ子哭くらむ其れその母も吾を待つらむぞ
（巻三・三三七）

をはじめ太宰帥大伴卿の讃酒歌十三首より成ってをり、そこに連作の妙味の発揮せられた事については別に論じたが（註四）、何れも「濁れる酒」とか「酒壺」とか「価無き宝」とか「夜光る玉」とかを詠じてをり、自然の風物に対しては殆んど関心が払はれてゐないのである。たゞ「遊びの道」の風雅を思はせるに足るものがあるに過ぎないのである。

旅人の作には嘱目の風物に託して亡き妻を偲ぶ綿々の情を詠じたものが多く、梅花の宴にあっては又こゝに会する三十二人が尽く梅の歌を詠ずると言った風雅の遊びを天離る鄙の地に催してゐる点に注目せらるべきであるが、巻三の讃酒歌はたゞ酒に興味の中心があるのであって、酒以外の自然の風物には一顧も与へてゐないのである。

猶巻一に於いては首位を占めた行幸従駕の歌は巻三にあっては第四位に落ちてをり、そこには巻一と同様

皇は神にしませば天雲の雷の上に廬らせるかも
（巻三・二三五　柿本人麻呂）

の如く帝徳の讃美に際して「天雲の雷」とわづかに自然物の匂ひを漂はせたものとか、

此処にして家やもいづく白雲のたなびく山を越えて来にけり
（巻三・二八七　石上卿）

の如く行幸地志賀に於いて「家」を思っては越えて来た「白雲のたなびく山」を振り返ってゐるものもある。中には

吾が命し真幸くあらばまたも見む志賀の大津に寄する白浪
（巻三・二八八　穂積朝臣老）

の如く「寄する白浪」に対して愛惜の心を歌ひ上げてゐるものもあるが、行幸従駕の歌に共通の宮地讃美の精神にも通ずるものがあるやうである。

猶巻三の雑歌にあって注目すべきはわづかながら初月とか雪とか

が単独に詠ぜられてゐる事である。即ち間人宿禰大浦の初月の歌

天の原ふりさけ見れば白真弓張りて懸けたり夜路はよけむ

（巻三・二八九）

倉橋の山を高みか夜ごもりに出で来る月の光乏しき

（二九〇）

の如きは後者まで初月の歌であるかについては疑問があるが（註五）、共に月明を詠じて「夜路」の好都合を喜んだり、山が高いがために月光のあまねくないのを歎いたもので月を単独に詠じてゐる所にその価値があるのである。

更に大納言大伴卿の歌

奥山の菅の葉凌ぎ零る雪の消なば惜しけむ雨な零りそね

（巻三・二九九）

の如く雪の消えるのを惜しむ風流を詠じたものもあって遠く巻八とか巻十の雑歌に呼応するものがあるのである。

巻一とか巻三の雑歌には、或いは行幸従駕の作に、或いは羈旅の歌に、宮地を讃美したり、風物に託して家を偲び妹を思ふ作の見受けられるばかりでなく、中には佳景に接して之に心を遣り、塩焼く煙とか雲とかを詠じ、筑波嶺に登るためには雪消の道をも厭はないのである。がくて行幸の地とか旅先でその風物を敍する場合にはその直接であると間接であるとを問はず必ずや自然観照の眼を高めずにはおかない筈である。こゝに景情一致の作の漸く現れるのと共に、風物を単独に詠じたり、風雅な萌しも仄見えるに到ってゐるのであるがこの事は巻八とか巻十の雑歌へと展開せずにはおかなかったのである。

四

巻八とか巻十にあっては四季の分類と雑歌相聞の分類とを交錯させて、それぞれ春雑歌春相聞、夏雑歌夏相聞、秋雑歌秋相聞、冬雑歌冬相聞としてゐるのであるが、今これらの巻の雑歌を見るに巻一とか巻三とかの雑歌と著しい相違を見出だすのである。即ち巻一には殆んど見受けられず巻三にわずか三首詠ぜられた純然たる自然の風物が圧倒的にこれらの巻において歌はれてゐるのである。

即ち巻八にあっては自然観照の歌が首位を示し短歌のみについて言へば約百十首、自然物に触発せられた歌詠はその約三分の一の四十首位に過ぎないのである。巻一や巻三にたとへ自然を詠ずる事はあったにしても、家とか妹とかへの思ひを誘発するくさはひに過ぎなかったのと著しい差違と言ふべきである。猶帝都関係の作の秋と冬とに各一首づつ見受けられる事も雑歌の故郷を物語るものと言ふべく、巻一とか巻三に於ける帝都関係の作の甚だ多く、何れも二位を下らなかったのを想起せずにはをられないのである。

更に巻十の雑歌にあっても自然の歌が首位を占め、風物に触発された歌の二位にある事も巻八と同様であり、前者と後者との比率は約二対一となってをり、巻八にあってわづかにその痕跡を示した帝都関係の作もこの巻では全くその姿を隠して了ってゐるのであり、自然の歌一色に塗りつぶされてゐる思がするのである。

自然諷詠の作の俄かに多くなったのを知りうると共に、春夏秋冬何れも相聞の歌を持ちながら、猶雑歌の中にさへ相聞的な歌詠を巻

八に於いては約三分の一、巻十にあっても約二分の一占有させてゐる所に、雑歌の生ひ立ちを物語るものがあり、この事は又自然を詠ずるにあたっても、とかく風物に託して自らの想情を歌はずにはをられない万葉歌人たちの嗜好を示すものであるのである。

今暫くこれら八・十の巻に詠ぜられた純然たる自然詠について眺めてみたいのである。

例へば巻八の

沫雪かはだれに零ると見るまでに流らへ散るは何の花ぞも　（巻八・一四二〇　駿河采女）

の如く雪とまがふ落花を詠じたり

うち靡く春来るらし山の際の遠き木末の咲きゆく見れば　（巻八・一四二二　尾張連）

の如や遠い梢の花によって春の来た事を物語ると言った季感を揺曳させる作さへも現れてゐる。

山部宿禰赤人の歌

春の野に菫採みにと来し吾ぞ野をなつかしみ一夜宿にける　（巻八・一四二四）

の如く春の野に野宿をするとまで歌って、自然の中に抱かれると言った風雅な感懐も歌はれてゐるのである。もとよりこの歌は些か大げさにすぎる所もあって、武田祐吉博士が

春の野にスミレを採みにきて一夜宿ったということが、いかにも仰山である。これは既に文雅の思想がさかんであって、野辺の風情を強調しようとして、かような作をなすに至ったもので、歌はれている内容は、かならずしも事実ではないであろう。たまたま何かの旅行のおりなどに、春の野に一宿したことのあるのを回想してかような表現を取ったものと考えられる。（註六）

と言はれた通り、文雅の思想の盛んとなった事を示すものであらう。又同じく赤人の

あしひきの山桜花日並べてかく咲きたらばいと恋ひめやも　（一四二五）

にも桜花の花期の短いのを歎く風流人の心が結晶させられてをり、文人風の先鞭をなすものと言ふべきである。又

明日よりは春菜採まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつつ　（一四二七）

の如く早春の美しい風光を優しく描いてゐるものもあるが、中には

わが夫子に見せむと念ひし梅の花それとも見えず雪の降れれば　（一四二六）

の如く人との関聯において梅とか雪とかを詠ずると言った事も亦行はれてゐるのを見るのである。

或いは桜花の歌として載せられた

をとめ等が挿頭のために遊士が蘰のためと敷きませる国のはたてに咲きにける桜の花の匂ひはもあなに　（巻八・一四二九）

反　謂

去年の春逢へりし君に恋ひにてし桜の花は迎へけらしも　（一四三〇）

なる歌を見ても「をとめ」とか「遊士」達の挿頭や蘰にせられて、桜花の賞玩せられたばかりでなく、桜の花を擬人化して「君に恋ひ

にてし」と言ったのなども風流人の宴席にてのすさびとも考へられるのである。

或いは赤人の

百済野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも

（巻八・一四三一）

の如きは鶯の鳴声によって春の訪れを歌ひ上げたものであるが、その鶯を冬の間から春を待ってゐるものとし、――己が春を待つ心をたぐへてゐるのはもとよりである――春の来復と共に、先づ之を思ひ出さずにはをられない所にも、作者の鶯によせる愛情の深さを示してゐる。土屋文明氏が「極めて概念的な歌」（註七）と評してゐるのには俄かに賛成し難い所である。

かくて

かはづ鳴く神なび川に影見えて今か咲くらむ山吹の花

（巻八・一四三五）

の如く優美な山吹の花を清らかな神南備川に写して眺めようとするものもあって、古今集以下の間接描写の淵源ともなってゐるのである。

或いは

山振の咲きたる野辺のつぼ菫この春の雨に盛なりけり

（一四四四　高田女王）

の如く春雨に煙る野の景色を山振と壺菫とによって示した可憐な作もあれば

時は今は春になりぬとみ雪零る遠山の辺に霞棚引く

（一四三九　中臣朝臣武良自）

の如く遠山に棚引く霞によって春の到来を示すと言った風に、季節感をふっくらと湛へた作品の多くなって来たのを感ずると共に、風流閑雅な文人趣味の自然を観照する場合にも漸くけざやかに現れようとしてゐるのを見逃しえないのである。

この事は春の歌のみでなく夏の部にも霍公鳥の晩く喧くのを恨む歌（一四八六）とか橘の花を惜しむ歌（一四八九）とかの載せられてゐるのによっても、秋の部に（巻八・一五一二）黄葉を錦に見立てて（註八）散るのを惜しみ時雨にもよほされて黄葉する高円山の風光を期待してゐるものもある（一五七一）。更に冬の歌にあっても亦

たな霧ひ雪も零らぬか梅の花咲かぬが代に擬へてだに見む

（一六四二）

の如く雪によってわづかに待つ梅を偲ぼうとする作もあり、

松蔭の浅茅が上の白雪を消たずて置かむことはかも無き

（一六五四）

の如く浅茅の上の雪をいつまでもそのまゝ置きたいと願ってゐるのなども、共に天平人の風雅な感懐であっていづれも古今集以下の流風の先駆をなすものである。

猶この事は巻十についても同様であり、

梅の花咲き散り過ぎぬしかすがに白雪庭に零り重りつつ

（巻十・一八三四）

今更に雪零らめやもかぎろひの燃ゆる春べとなりにしものを

（一八三五）

などの如く季節の推移に注意を向けたり、

いつしかもこの夜の明けむ鶯の木伝ひ散らす梅の花見む
（巻十・一八七三）

の如く夜明けを待って早く梅の花を眺めたいと詠ずるものもある。或いは雁と黄葉とを組合せて

雁がねの来鳴きし共に韓衣龍田の山はもみぢ始めたり
（二一九四）

雁がねの声聞くなべに明日よりは春日の山はもみぢ始めなむ
（二一九五）

と詠じてゐるのなども、橘と霍公鳥、萩と鹿などと共によく複雑な歌境を展開したものではあるが、一方において型に嵌った弊を蔽ふ事は出来ないであらう。

猶月を詠じては

天の海に月の船浮け桂梶かけて榜ぐ見ゆ月人壮子
（二三二三）

の如く天を海、月を船、桂を梶に見立ててゐるのなども、人麻呂歌集に見える

天の海に雲の浪立ち月の船星の林に榜ぎ隠る見ゆ
（巻七・一〇六八）

と共に懐風藻所載の文武天皇の御製の月の詩

月舟移霧渚楓檝泛霞浜

を思はせるものがあり、漢文学の影響による文人趣味に棹さすものであり、

此の夜らはさ夜ふけぬらし雁が音の聞ゆる空ゆ月立ち渡る
（二二二四）

思はぬに時雨の雨は零りたれど天雲霽れて月夜さやけし
（二二二七）

などの如く秋晴の空を渡るさやかな月の動きを描いてゐるものもある。

更に冬の歌にあっても

巻向の檜原もいまだ雲居ねば子松が末ゆ沫雪流る
（巻十・二三一四）

の如く流れる雪を優しいものとして受け留めてをり、花を詠んでも

誰が苑の梅の花ぞもひさかたの清き月夜に幾許散り来る
（二三二五）

の如く清き月夜に美しく散るものとして眺めてゐるのである。

かくて巻八、巻十の雑歌には春夏秋冬の風物を単独に詠じた佳作の見られるばかりか、そこには文人趣味の既に色濃く流れてゐるのを見逃しえないのであり、鳥の鳴くのも花の散るのを惜しんでの事とし、浅茅の上の白雪をいつまでも消さずにおきたいものとも願ふのである。

巻一、巻三などの雑歌と比較して自然観照の歌も漸く優美繊細なものとなり了ったのを見るのであり、こゝには人麻呂の作に見られるような壮大な景観はも早や見受けられないのであり、たゞ優しいもの美しいものが喜ばれてゐるのを見逃しえないのである。

五

転じて題詞を見ても巻一とか巻三とかではわづかに初月歌二首

（巻三・二八九――二九〇）があるばかりであるが、巻八の雑歌には

小治田広瀬王霍公鳥歌（巻八・一四六八）

大伴家持橘歌（一四七八）

大伴家持白露歌（一五七二）

大伴宿禰家持鹿鳴歌（一六〇二――一六〇三）

太宰帥大伴卿梅歌（一六四〇）

忌部首黒麿雪歌（一六四七）

の如くの何某の何の歌と作者と風物とを並記した題詞が非常に多いのである。しかも、巻十にあっては例へば春雑歌では詠鳥詠雲詠霞詠柳詠花詠月詠雨詠河詠煙と言った風に風物によって多くの歌を類聚してをり、詠物的な態度を一入強く打ち出して来てゐるのが見られるのである。

巻八と巻十の両巻におけるかゝる題詞の書き方の相違はそれぞれの相聞歌に於いても亦見られる所であり、巻八にあっては作者とその歌を贈られる対手とを明記して

大伴宿禰家持贈坂上家大嬢歌（巻八・一四四八）

笠女郎贈大伴家持歌（一四五一）

厚見王贈久米女郎歌（一四五八）

などの如く記してゐるのが普通であるのに、巻十の相聞歌にあっては例へば春の部では寄鳥寄花寄霜寄霞寄雨寄草寄松寄雲の如く寄せる風物によって類聚せられてゐるのを見るのである。巻十の雑歌に風物による類聚が行はれてゐるのと共に、巻十の相聞歌にあっても その寄せる風物によって歌が集められてゐるのである。

即ち巻十にあっては雑歌も相聞歌も共にそこに詠ぜられた風物によって類聚せられてゐるのであり、春雑歌とか春相聞とかとそれぞれ春夏秋冬の四季を雑歌はもとより相聞の歌にまで冠せられてゐるのも、亦共にその風物についての思を或いは直接に或いは間接に詠出したものとして注目せらるべきである。そこには雑歌と相聞歌との交流を物語るものもあり、後に到って漸く雑歌の中心をなす自然の歌も、最初は行幸従駕の作とか羈旅の歌とかの影に隠れてわづかにものせられ、風物に託して家郷の空を偲び家なる妹を懐しんでゐたに過ぎなかったのである。そこには自然を単独に詠出しようとする傾向の順次育成せられて来たその過程を考へさせるものがあって興味深いものがあるのである。

猶巻八、巻十の季感を示す風物（註八）を見るに春雑歌にあっては

巻別／風物	巻八	巻十	計	順位
梅	七	六	一三	一
桜	三	九	一二	二
霞	一	一一	一二	二
春雪	〇	一一	一一	四
鶯	三	八	一一	四

夏の風物としては

巻別／風物	巻八	巻十	計	順位
霍公鳥	二五	二八	五三	一
橘	五	五	一〇	二
石竹	一	二	三	三

秋の風物では

巻別／風物	巻八	巻十	計	順位
黄葉（紅葉）	二一	四三	六四	一
萩	一九	二四	四三	二
鹿	七	一六	二三	三
雁	一〇	一三	二三	三
露	八	九	一七	五
月	二	七	九	六

冬の風物としては

巻別／風物	巻八	巻十	計	順位
雪	八	一二	二〇	一
梅	九	五	一四	二

の如くであり、春のものとしては未だ古今集以下の如く桜が圧倒的ではなく、梅がわづかにリードしてゐるけれども、桜も梅に迫るものがある。夏は霍公鳥が第一位、冬は雪が一位を占めてゐる事も、古今集以下の勅撰集と同様である。ただ秋のものとしての月は勅撰集にあっても容易に首座を占める事が出来ず、三代集にあっても、古今（三十九首）はもとより、後撰（四十六首）拾遺（二十一首）共に紅葉の方が圧倒的であり、（註九）古今集に於ける月（八首）は天象部にあっても猶風（十六首）露（十一首）につゞいて第三位を占めるにすぎず、この傾向は後撰拾遺においても変る所がないのであるが、――後撰にあっては露（三十八首）風（三十三首）月（二十二首）の順序、拾遺にあっては風（十四首）月（八首）霧（六首）の順序と多少の動きはあっても未だ絶対に首位を占めえないのである。――後拾遺以後に至って、はじめて風よりも露よりも更に紅葉よりも月が絶対優勢を示して、この傾向は金葉・詞華・千載を通じて些かも変る所はなかったのである。

月が秋の風物の首位を占めるに至った事情については「歌合より勅撰集への一線」（註十）において詳論した所であるが、多くの歌を番へねばならぬ歌合の題の兎角興味の持続し易い代表的な風物に集中する結果となり、そこに一季一風物といった花・郭公・月・雪の系譜を形成させる事ともなるのである。この傾向の同じ作者を擁する勅撰集の歌にも作用して来るのは当然と考へられるのである。

しかし三代集時代には猶月は風とか露とかに対して首位を占めえなかったばかりでなく、古今集にあっては紅葉（三十九首）雁（十四首）萩（十二首）女郎花（十二首）菊（十首）に対してその頻度は遙かに下にあるのをみても、三代集にあっては花・郭公・月・雪の形成は未だ熟してゐなかったと見るべきである。

巻八、巻十に於いて黄葉の首位を占めてゐる事は古今集の先驅をなすものであり、春の部にあっても桜は未だ首位を占めてはゐないけれども、既に第一位の梅に迫る勢を示してをり、風雅な感懐を盛ったものが多く、優しく美しい風物の特に愛好せられたばかりでなく、季のものによる類聚まで行はれ、風物に対する眺め方もやゝ類型に堕するものさへ現れるに至り、全く古今集の四季の歌の素地を形作ってゐる思がするのである。

猶風物を詠ずる場合にも、単独に之を詠ずるだけでなく、他の風

物との関聯に於いて屢〻之を眺めようとしてゐるのも、単純なものよりも複雑なものを愛好する証拠であり、霍公鳥と橘との組合はせはもとより、卯の花と霍公鳥、鹿と萩、黄葉と時雨とか、露と雁との組合はせも亦見受けられるのである。

朝露ににほひそめたる秋山に時雨な降りそ在り渡るがね
（巻十・二一七九）

雁が鳴の寒き朝明けの露ならし春日の山を黄だすものは
（二一八一）

時雨の雨間なくし零れば真木の葉もあらそひかねて色づきにけり
（二一九六）

の如きがそれであって、襞の細かさを感ぜしめるものはあるにもせよ

吾背子が挿頭の萩におく露を清かに見よと月は照るらし
（二二二五）

白露を玉になしたる九月のありあけの月夜見れどあかぬかも
（二二二九）

などの如く繊細なものを懐しむ歌境と共に漸く古今集の世界の近まりつゝある事を物語るものがあるのである。

折口信夫博士が赤人を論じて

彼がまづ拓いたと思はれるのは趣向の歌である。自然を矯める傾向はそこに兆したがみやびと言ふ宮廷風都会風の文学態度を創立して都と鄙との区別を立てる様な傾向の先駆をした。（註十一）

と言ってをられる如く、巻八、巻十の雑歌には赤人によって代表せられる優美繊細な都人士の感懐によって満たされてをり、直ちに古今集に接続させる事の出来るほど自然に浸った歌詠を多く見出だす事が出来るのである。――勿論類型的に見えるこれらの歌の中にも古今集とはちがった万葉人の呼吸の感ぜられるものも少くないけれども。

註一、不知火第六号（昭和二十九年一月発行）所載の拙稿「万葉集に於ける連作歌に就いて」参照。

註二、熊本大学教育学部研究紀要第六号（昭和三十三年三月発行）所収の拙稿「万葉集の修辞」参照。

註三。沢潟久孝博士万葉集注釈巻第三、三四八頁――三四九頁参照。

註四　不知火第六号（昭和二十九年一月発行）所収の拙稿（万葉集に於ける連作歌に就いて」参照。

註五、沢潟久孝博士万葉集注釈巻第三、二九〇頁参照。

註六、武田祐吉博士万葉集全註釈七、三三頁参照。

註七、土屋文明氏万葉集私注第八巻一六頁参照。

註八、風物の頻度数は石井庄司氏「雑歌四季雑歌論」（春陽堂万葉集講座第六巻所収）の表による。但し秋の部には露が十四首と九首と二度記されてゐる。私の調査に拠れば巻八の五首は八首であって巻十の九首と合せて計十七首となるが、ここに掲げる雁とか月とかとの順位を狂はすほどではない。

註九、詳しくは建国大学研究院月報（昭和十八年八月発行）所収の拙稿「歌合より勅撰集への一線」に挿入の八代集に於ける四季の風物使用頻度表を参照。

註十、同前「歌合より勅撰集への一線」参照。

註十一、折口信夫全集第一巻古代研究所収の「敍景詩の発生」参照。

――熊本大学教授――